



宗祖親鸞聖人 報恩講

10/30[土]

① 14:00 - 15:30

10/31[日]

② 10:00 - 11:30

③ 14:00 - 15:30



イラスト 一ノ瀬かおる (『いつでも歎異抄』より)

新型コロナウイルスの感染状況が（この原稿を書いている時点では）落ち着きを見せています。これを受け今般の報恩講は久々にご門徒の皆様のお参りを受け入れて行うこととなりました。ただ感染リスクがなくなったわけではないので、時短や参拝の分散、お経の黙読など諸々の制限の元での実施となります。ご理解ご協力の程、よろしくお願いいたします。

それでも本当に久しぶりに皆さんと一緒にご法話を聴くことができます。住職としてはスキップしたくなるような心持です。入寺して10年、皆さんに浄土真宗の素晴らしさを伝えたいと願いつつ、ずっと自分の力不足を感じてきました。だからこそ、永代経と報恩講の時には本物のご法話に触れてほしいと、ご講師の選定には強くこだわってきました。

去年の永代経と報恩講ではご講師を断らねばならず、悔しい思いをしました。今年の永代経はご講師にお越しいただいたものの、皆さんにはオンラインでしかお聞きいただけず心残りでした。それだけに今回皆さんと一緒にご講師のお話を聴くことができるのが、この上なく嬉しいのです。

ご講師の井上先生は2年越しのオファーが実ってお越しいただけることになりました。終始明瞭で知性溢れる語り口ながら、お話が肝要部分差し掛かると根底にあるパッションが溢れ出てくる、そんなご法話を聴かせてくださいます。どうぞお楽しみに！



【講師】井上見淳 師

福岡県飯塚市正恩寺副住職、龍谷大学准教授、中央仏教学院講師。近著に『真宗悪人伝』（法蔵館）、『いつでも歎異抄』（本願寺出版社）ほか。

実は住職と龍谷大学で同級生だったそう...（住職は覚えてなかった）



「いつも一緒にいるよ」

5/16の永代経のご法話の内容を掲載します。大好きだったお祖父さんとの思い出を通して阿弥陀様の願いを味わうあたたかいお話でした。皆さんにはコロナの為お参りいただけず、配信でしかお聞きいただけませんでした。こちらをお読みいただき、改めて味わっていただければと思います。



【ご講師】 中西理奈 師

高島市安曇川町眞光寺、本願寺派布教使、京都女子高等学校常勤講師

永代経と降誕会

こんにちは。高島市から参りました中西理奈と申します。普段は京都の学校で教員をしていて「宗教」の授業を担当しています。

本日は二つの法要を一緒に勤められました。一つは永代経。「経」とはお釈迦様が説かれた仏様の教えのことです。それが永代に続いていくことを願って勤められるのが永代経法要ですね。

もう一つは宗祖親鸞聖人降誕会です。「誕」という字を辞書で引くと「生まれる」という意味の他に「いつわる」「あざむく」「でたらめ」と書かれています。これらの意味を合わせれば、誕生とは偽りの世に生まれてくることともいえます。私たちは生きていく中で様々なことに悩み苦しみますが、そもそも生まれた世界が偽りの世だとするならば、むしろ苦しみの中に生きているのが私たちの本当の姿だと

いえます。その偽りの世界に真実の教えを伝えるために親鸞聖人が降り立ってくださった。そのことを喜び、その教えを共に聴かせていただくのが降誕会の意味です。

前に生まれんものは・・・

さて、そんな本日の法要に御讃題（法話のテーマ）として選ばせていただいたのは、中国の道綽禪師のお言葉です。

「前にまき生れんものは後のちを導き、後に生れんひとは前まへを訪へ、連続むくう無窮にして、願ねがはくは休やす止どせざらしめんと欲ほつす。無辺むへんの生死しょうじ海かいを尽つさんがためのゆゑなり」

「生れん（生まれる）」とは、この世に生まれるという意味ではなくて、阿弥陀という仏様の世界に生まれるという意味です。浄土真宗の教えではこの世の命を終えられた方は仏様の世界に往かせてい

ただき、またこの世に還って人々を教え導くといわれますから、「先に亡くなつて仏様の世界に往かれた方々は、後にやってくるであろう今生きている人々を導きなさい。そして今は生きていられる後について同じ世界に行くことになる人々は、先に往かれた方々を訪ねていきましよう」という意味です。

続けて「連続無窮にして、願はくは休ませざらしめんと欲す」その導き訪ねる営みは連続して止まることなく、延々と続いてほしい。

その理由は「無辺の生死海を尽さんがためのゆゑなり」偽りの世界に生まれてきた私たちの姿が、辺りのない海に溺れるものに喩えられています。そしてそういう人々が一人残らず救われていくように、阿弥陀様のお心が途切れることなく伝わっていくことを願うと結ばれています。

親鸞聖人はこの道綽禪師のお言葉を

『教行信証』の最後に引用されています。

『教行信証』とは聖人が二十年かけて浄土真宗の教えの体系を纏め上げたもので、聖人の思いが詰め込まれたお書物です。その最後にこのお言葉を引かれたところに、一人でも多くの方に阿弥陀様のお心に出会ってほしいという親鸞聖人の強い想いを感じ取らずにはおれません。

ではその阿弥陀様のお心とはいったいどんなものでしょうか。私自身はそれ今は亡き祖父との想い出の中に感じ取ります。そこで今日は少し私の祖父のお話をご紹介します、皆さんにも味わっていただければと思います。

大好きだったじいちゃん

私は佐賀県の出身です。佐賀県に行つたことのある人いますか？大体この質問をすると皆さん長崎とか福岡には行ったことあるけど佐賀は通り過ぎたつていうんです（笑）。とってもいいところなん

ですよ。ぜひ一度お運びください。

そんな佐賀県は佐賀市のお寺に私は生まれました。当時の家族構成は祖父母と両親と六歳年上の姉、そして私の六人家族でした。



祖父は私が物心ついた頃には既に住職を退いて隠居生活を送っていましたが、みんなから慕われる優しいおじいちゃんでした。そして特に孫である私に優しくしてくれました。祖父のことでまず思い出すのは、小学校のころ毎日手を繋いで学校まで送ってくれたことです。こう見えて私は人見知りなところがあって、それで学校に行きたくないと「登校拒否」するようになってしまっ

たんです。それを心配して「学校行くの怖いなら、じいちゃんが一緒に行くか？」と毎日一緒に来てくれました。祖父のおかげで私は小学校に通うことがで

きました。

また祖父は私がお経を覚えるときよく褒めてくれました。我が家では毎朝家族揃って正信偈のお勤めをしていました。毎朝勤めていると幼いながらに覚えてそらで唱えられるようになります。それを祖父の前で披露すると、それは喜んで褒めてくれました。それが嬉しいものだから私は他のお経も覚えめました。したらまた褒めてくれるんです。

それからお寺で法要が勤まる時、小さい頃から父に「ご法話をちゃんと聞きなさい」と半ば無理矢理本堂に連れていかれていました。でもやっぱり小さいから意味も分からないし面白くない。何より正座が嫌でした。そんな時私はよく祖父の所に避難しました。祖父はいつも本堂から襖を一枚隔てたところで法話を聴いていました。そこだと足を崩していてもバレませんし、祖父も咎めることはありません。むしろ「理奈ちゃん法話ちゃん

と聴いてえらいねえ」と褒めてくれるんです。だからいつしか法話を聴くときは

そこが私の定位置になりました。また祖父はアコーデオンの弾き歌いが得意でした。おオハコは「しんらんさま」という歌でした。

一、そよかぜわたるあさのまど

はたらく手のひらあわせつつ

南無阿弥陀仏となえれば

しんらんさまはにこやかに

わたしのとなりにいらいっしやる

二、きらめく夜空星のかけ

あらしにきえてもかくれても

南無阿弥陀仏となえれば

しんらんさまはともしびを

わたしのゆくてにかざされる

三、この世の旅のあけくれに

さびしいのちをなげくとき

南無阿弥陀仏となえれば

しんらんさまはよりそって

わたしの手をとりあゆまれる

滝田常晴作詩／古関裕而作曲

小さい頃はやはり歌詞の意味が分からず、祖父に「どんな意味？」って聞きました。すると祖父は「じいちゃんが一番好きな歌だよ。一緒に歌おう」と言っ、それで意味はあまり分からないままよく一緒に歌っていました。



突然の別れ

とにかく優しくくて大好きだった祖父。そんな祖父が亡くなったのは、私が小学校五年生の時でした。

祖父はよく東南アジアのタイに行っていました。戦没者の遺骨収集や現地の子どもたちの就学支援のボランティア活動をしていたのです。

小学五年生の夏、私は本願寺の念仏奉仕団に参加するため京都に行くことに

なっていました。同じ頃に祖父はまた夕
イに行くというので、今度はいつ帰るか
尋ねました。すると祖父は「じいちゃん
はね、いつも理奈ちゃんと一緒に居るよ。
じいちゃんの心はいつも理奈ちゃんとい
緒だよ」と言います。私は苦笑いしなが
ら「じいちゃんそうじゃなくてね、いつ
帰ってくるかって聞いたるんよ」と言う
と「じゃあ理奈ちゃんが京都から帰って
くるときにはじいちゃんが駅に迎えに
行ったるよ」と言ってくれました。

間もなく祖父はタイに発ち、私もしば
らくして京都に行きました。そして数日
後京都での予定を終えて地元の駅に帰っ
てきました。でもそこには祖父の姿はな
く、代わりに母がいました。

祖父はどうしたのかと母に聞いても無
言です。おかしいなと思いつながらお寺に
帰ってくる、駐車場には法要でもない
のに車がいっぱい停まっています。ま
すますおかしいと思って家に入ると中に

は親戚が全員集合していました。久しぶ
りに会ういとこもいたのでちょっとテン
ションが上がってしまった。「今日何かあ
るの？」と声をはずませて母に聞きまし
た。流石に居た堪れなくなったのか母は
泣き出してしまいました。そしてようや
く教えてくれました。「落ち着いて聞い
てね。じいちゃんね、タイでね、亡くなっ
たんやって」

もう親戚が全員集まっていますので、
その夜にお通夜が行われ、翌日葬儀が営
まれました。とにかく暑い日で大きな氷
柱があちこちに置かれていました。そし
て本堂に入りきれないお参りの人の列
が、山門を出て表の道路まで続いていた
ことを覚えています。またタイから祖父
が支援していた女の子がはるばる来てく
れて、メッセージを読んでくれました。
タイの言葉だったので意味は分かりませ
んでしたが、涙ながらに一生懸命読み上
げる姿から祖父を慕う思いと感謝の気持

ちが伝わってきました。

こうしてつつがなく通夜葬儀は執り行
われましたが、一つだけ通常の葬儀と
違ったことがありました。それは祖父の
遺体がなかったということです。海外で
亡くなってしまったがために遺体はすぐ
には帰国できなかったのです。そのこと
もあってか、たくさんの人が悲しんでい
る中で、私は祖父の死を今ひとつ実感で
きずにいました。どうしてもそのうち玄
関開けて「ただいま」って帰ってくるよ
うな気がして、ほとんど泣くこともでき
ませんでした。

十三回忌をすっぱかして…

その後もずっと実感が薄いまま時を過
ごし、いつしか私は大学生になりました。
実家を離れ京都でひとり暮らしをしてい
たのですが、その頃祖父の十三回忌が
巡ってきました。七回忌まではまだ実家
で暮らしていましたから、あまり深く考

えずに法事にお参りしていましたが、その時は大学で仏教の勉強をしている身ですから、法事がどういう意味をもつか、流石にもう分かっています。未だに祖父の死を認められていなかった私は、どうしても法事に帰りたくないと思いました。

それでどうしたかというところ、法事と重なる日程でお坊さんになるための研修に参加することにしたんです。その研修は十日間泊まり込みで携帯も取り上げられるので法事にも行けないし様子を電話で聞くこともできない環境です。しかも目的はお坊さんになるということですから、両親にとっても嬉しいことに違いありません。法事に出ないと言っても咎められないと考えたわけです。

それで私は、本当に十三回忌をすっぴかしたんです。すっぴかして何してるかっていうとお坊さんになる勉強してるんです。僧侶たるもの自身がしっかりと

死と向き合い、そのことの大切さを人々に伝えていかなければならない。そんなお話しを講義で聞きながら、私は今祖父の死と向き合うことから逃げている。後ろめたさと矛盾に耐えられず、その研修の先生に思い切って相談しました。

「実は私、祖父の十三回忌を蹴って今こうやってお坊さんになろうとしてます。でも祖父の死を受け入れられないのにお坊さんになろうとしているのは、やっぱりおかしい話じゃないですか？」
と言うとその先生は「それでええよ」と仰いました。そして「そもそもお坊さんというのは自分で『なる』もんじゃない。今からもっとたくさん勉強して、いろんな方のお育てをいただいて『ならせていただく』んだよ。だからこれからもたくさん勉強しなさい」と仰ってくださいました。その言葉が私の中ではストンときて、心が軽くなりました。

いつも一緒にいるよ

十日間の研修課程を終え、その足で佐賀に帰り家族にお坊さんの資格をいただいたことを報告しました。帰省の間、先生の言葉の通りたくさん勉強しなければと、早速お聖教しょうぎょうを開きました。その時目に留まったのが、本日最初に紹介した御文でした。

「前に生れんものは後を導き、後に生れんひとは前を訪へ、連続無窮にして、願はくは休止せざらしめんと欲す。無辺の生死海を尽さんがためのゆゑなり」

「あっ」と思いました。祖父は小学校へ行き渋る私の手を引いて、毎日一緒に歩いてくれました。おかげで私は小学校へ通うことができました。そして今、私はお坊さんになって仏教を学ぶようになりました。いつの間にかこうなっていたにしか考えていませんでしたが、思い返してみればこれも、祖父がずっと一緒に

にいて、導いてくれたおかげだったと気付かされたのです。

祖父は私がお経を覚えた時、隣で法話を聴いた時、一緒に「しんらんさま」を歌った時、いつも「理奈ちゃん偉いねー」と褒めてくれました。でもそれは単に上手にできたことを褒めたということではなくて、私が仏様のお心に出会わせていただく姿を喜んでいたので。



今なら祖父が「しんらんさま」の歌が好きだった理由も分かります。祖父はいつもこの歌を通して

阿弥陀様や親鸞様とご一緒にいたんだと思います。そしてその阿弥陀様を抱かれて仏様になった祖父は、今は南無阿弥陀仏の御名となって私と一緒にいて、阿弥陀様のお心を伝えてくれています。

タイに経つ前に祖父は「いつも一緒にいるよ」と言ってくれました。その時は

冗談と思っていたけど、その言葉の通り、私が祖父の死を受け入れられずにいた間もずっと一緒にいてくれていた。そのことに気がついた時、お葬式では流せなかった涙がようやく溢れ出てきました。それは「じいちゃんはどう玄関開けてただいまとは言わないんだな」というこの世の別れを悲しむ涙でした。でも悲しいだけではなくて、そんな私にずっと祖父は寄り添ってくれていた、そしてこれからも一緒になんだということに気づけた喜びの涙でもありました。

これからも、ずっと

ずっと祖父の死を受け入れられなかったこの私は、正に「無辺の生死海」で迷い苦しむ存在そのものでした。そんな私を導き阿弥陀様の心に出会わせてくれたのは、仏様になった祖父でした。祖父に導かれて阿弥陀様のお心を頂ける私になったならば、これからさせていただく

ことはただ一つ、阿弥陀様の心をこれから先もずっと聴かせていただくこと。これだけだなと思っています。

皆様にもこれまでに大切な方とのお別れがあったことでしょう。でも今こうして仏様の前に座り、手を合わされています。これは一人でできることはありません。先立っていかれた方々が「仏様の心に出会ってくれよ、命の尊さを知ってくれよ」と伝えてくださっているからこそ、今こうして一緒に仏様の前で手を合わせる事ができるのです。

本日は永代経と、親鸞聖人降誕会のご縁でした。どちらも先人が阿弥陀様のお心や親鸞聖人のみ教えが永代に伝わるようにと、大切に私達に残してくださいました。ご縁でした。それを私たちが絶やさぬよう、これからも一緒にお念仏を申させていただきます。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏：

(文責 杉生値)



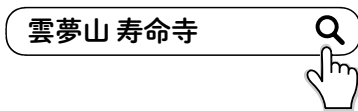
報恩講 オンライン中継の視聴方法

感染が心配だったり健康状態に不安があるなどの理由で当日お参りいただけない方に向けて、法要の様子をオンライン中継いたします。配信は法要当日の10分前から、寿命寺のホームページでご覧いただけます。PCやスマホが苦手な方は、ご家族に聞いてみてください（できたら一緒にご覧ください）。もし身近に分かる方がなければ、お気軽に住職にお尋ねください。



パソコン

GoogleやYahoo!で「雲夢山 寿命寺」と検索してください。



スマホ・タブレット

下記のQRコードをリーダーで読み取ってください。



「お寺葬」のご提案



私が入寺してからの10年、殆どのお葬式は葬儀社のホールで行われましたが、以前は寿命寺の本堂でのお葬式も少なからずあったとお聞きます。しかしおそらくその際はお内陣を閉じ、別途祭壇を組んだものと思います。

今回のご提案は、お内陣を開いてそのお荘厳を活かして行うお葬式です。故人が慣れ親しんだお寺の阿弥陀さまに見守られてのお葬式は、ご遺族にとって大きな安心に繋がるでしょう。祭壇が不要になる分、費用を抑えられるメリットもあります。

「ご提案」と言っても、お寺が葬儀社に代わって葬儀を請け負うということではありません。これまで同様、最低限の会場設営やご遺体の処置・搬送、返礼品の手配などは葬儀社にご依頼いただかなくてはなりません。ただ予めご相談いただくことで、本堂のお荘厳を活かした温かいお葬式を一緒に作り上げていくことができるというお話です。

とは言え、場合によってはお寺でやるのが難しいこともあります。興味を持たれた方は、まずはお気軽に住職にお声がけください。

ご懇志・寄進のご報告

ありがとうございました。

LINE やってます！

寿命寺の公式アカウントを開設しました。

門徒の皆さまへの諸連絡に用いていきますので、是非ともご登録をお願いします。

スマートフォンで下記のQRコードを読み込んでください。

